

カートリッジは手作業でリサイクルへ

エプソン製品の仕分け担当「エプソンミズベ」



①カートリッジは人の手で分類
②諏訪湖近くにあるエプソンミズベ本社
③緑色のICチップを取り出します
④作業をしていた平林昌也さん。昨年のアビリンピック(全国障害者技能競技大会)全国大会で、金賞を受賞しました

使用済みインク・トナーカートリッジにベルマーク点数を付与している協賛会社のエプソン販売(ベルマーク番号73)。集まったカートリッジは、長野県諏訪市の「エプソンミズベ」という会社で集約・仕分けしています。10月初旬、同社を訪ねました。

社名のとおり諏訪湖近くに本社・湖畔工場があります。ここを含め県内に7拠点あり、社員数は185人、うち139人が障がいのある人です(2019年6月1日現在)。親会社のセイコーエプソンが、障がい者雇用を促進するため1983年に設立した「特例子会社」です。

インクカートリッジは、一箱ずつ手作業で取り出し、他社製の製品が入っていないか目視で確認。そして製品

別バーコードと照らし合わせていきます。その数は200～300種類も。作業していた平林昌也さんは「間違わないように慎重にすること」を徹底していると言います。

こうして受け入れたカートリッジは、別の部屋で分類されます。台車1台に36個の回収箱が載りますが、おおよそ1日に2台のペースでこなします。その後、キャップは洗浄して再利用、ICチップからは貴金属が回収され、プラスチック素材は社内向けのコンテナや建材などに生まれ変わります。

同社の業務は、他にも時計部品の組み立てや基盤のんだ付け、名刺やIDカード作成、資料の電子化、印刷や製本、ビルクリーニングなど多岐に渡ります。「バリエー

ションを多く設け、社員の特性を活かしやすくしています」と管理部長の荒井孝昌さん。障がいによって異なる「ストレングス(強み)」を活かそうとしているのです。諏訪事業部の宮坂礼二さんによると「信じられないくらい長時間、一つのことに集中して取り組める社員もいる」とのこと。昨年のアビリンピック(全国障害者技能競技大会)全国大会では、5人の社員が出場し、金賞2、銀賞と銅賞各1という素晴らしい成績を収めました。

ベルマーク運動で集められたインクカートリッジは、こうした人の手によって、貴重な資源として大切に扱われていました。環境保全につながるリサイクル活動の輪を広げる大きな力になっていると感じました。

ものづくりの「歴史」と「最先端」を学ぶ

セイコーエプソン本社事業所を見学しませんか

協賛会社のエプソン販売(ベルマーク番号73)の親会社、セイコーエプソンが館内見学を受け付けています。長野県諏訪市の本社事業所内にある「ものづくり歴史館」と、ほとんど水を使わずに紙を生産できるPaperLab(ペーパーラボ)を見学出来ます。



ベルマーク運動での「エプソン」といえば、インク・トナーカートリッジやプリンタを思い浮かべる方が多いでしょう。しかし、同社は1942年創業の、長い歴史を持つ「ものづくり企業」なのです。腕時計、プリンタや製紙機、プロジェクターやメガネをかけて映像を楽しむスマートグラス、産業用ロボットなど、多種多様な商品について学ぶことが出来ます。

続いて、PaperLabが置いてあるアップサイクルセンター。「アップサイクル」とは、不要になったものの特徴を活かしながら、新たなモノを作り出すことです。不要なものを一度資源に戻すリサイクルや、使ったものを繰り返し利用するリユ

ースとは違う概念です。

PaperLabは、使い終わったコピー用紙などを材料に、水や新たな木材をほとんど使わず再生紙を作り出す「乾式オフィス製紙機」。材料になる用紙は繊維になるまで分解されるため、セキュリティ面での心配もありません。出来上がった再生紙は、真っ白な紙に比べて柔らかな感触で、目に優しい色味が特徴です。

見学についての詳細はエプソンのHPをご覧ください。

◆セイコーエプソン本社は、環境に優しい高速インクジェット複合機「LX-10000F」とPaperLabを合わせて使い、オフィス内の紙資源循環を実現しています。



①懐かしのハンディカラオケ「まめから」も同社製品
②ものづくり歴史館にはリサイクルの説明も
③世界初の宇宙に飛び立ったプリンタ

地震被害の早来中にマーク寄贈

北海道キリンビバレッジ、復興キャンペーンで収集

協賛会社キリンビバレッジ(ベルマーク番号54)の商品を北海道で販売している北海道キリンビバレッジ(本社・札幌市)は、ベルマーク4万3932点を9月26日、昨年の北海道地震の被災校、安平町立早来中学校に寄贈しました。

同社は北海道で今年5月13日から6月27日まで復興キャンペーンを実施し、

ベルマークを集めました。贈呈式では同社流通本部の渡辺昌彦本部長が「復興支援をしたいという北海道のみなさんの思いが詰まっているベルマークです。復興に向けて少しでもお役に立てれば幸いです」と述べ、目録を木村義人校長に手渡しました。木村校長からは、渡辺本部長に感謝状が送られました。早来中は10

月に野球用品などを購入しました。

小笠原伴行教頭によると、早来中の現在の生徒数は96人。プレハブ校舎は耐寒仕様ですが夏は室温が上がり、教室の簡易エアコンでは限界があって困ったそうです。町では新校舎は早来小と一体化させて作る計画ですが、引っ越しは2023年1月になる予定です。



早来中の木村義人校長(右)と、北海道キリンビバレッジ流通本部の渡辺昌彦本部長